



増補訂

内科撰要

卷九

洋学文庫  
文庫 8  
C 27  
9





增補重訂内科撰要卷九

遠西 玉函涅斯垚我爾德兒 著

津山 宇田川 玄隨 晉 譯

加賀 藤井 方亭 俊 校註 增譯

痙攣搐掣篇第二十一

痙攣、羅甸名「テタニ」ス、和蘭名「カ  
 コン」トシテ、和蘭名「ストイ」テ、  
 コン、通シテ、羅甸名「コン」トシテ、  
 二、症、通シテ、羅甸名「コン」トシテ、  
 所謂、痙攣、搐掣、疾、飛、驚、風、掣、引、蹇、攣、拘、急、角、弓、  
 及、積、聚、衝、逆、ノ、擊、急、抽、掣、等、皆、斯、ニ、屬、ス、  
 衝、逆、ノ、擊、急、抽、掣、等、皆、斯、ニ、屬、ス、  
 附、子、宮

增補重訂内科撰要

卷九

風雲堂藏

痙攣拮掣ノ大較ヲ論ス

凡ソ我意ニ隨テ運轉舉動ヲ爲ス所ノ諸筋第七十九  
 章ニ自由ニ運動屈伸スルヲ能ハズ却テ我意ニ逆ノ  
 註ス自由ニ運動屈伸スルヲ能ハズ却テ我意ニ逆ノ  
 テ自ラ攣急拮掣シ動ハ手足口眼ノ如キハ平常運  
 ズ然ルニ今思ハザルニ自ラ拮掣シ又動サント欲ス  
 レレ自由ナラズ伸ン欲スレバ却テ攣縮スレバ  
 運動ニ逆フテ自ラ或ハ胃及ビ腸ノ筋纖維ノ如キ平常  
 我意ニ隨ハズシテ自然ニ運動スル者モ亦拮引攣縮  
 ス是ヲ痙攣或ハ拮掣ト曰フ筋纖維ハ總テ諸筋ノ體  
 外部肢體ノ諸筋ノミナラズ心藏橫膈胃腸諸脈等  
 テ伸縮弛張ノ機轉ヲ爲ス所ノ諸器ハ皆筋纖維ヲ具  
 ルナリ○内藏諸器脈管等ハ元ト人意ニ隨ハズシテ  
 自然ニ運動スル者ナリ喩ヘハ胃腸ノ飲食ヲ消

痙攣拮掣ノ分別ヲ論ス

化物ヲ傳送スル運動ノ如キハ我意ニ隨テ自由ニ是  
 ヲ遲速進退セシムルヲ能ハズ且運動スルヲ欲セ  
 ズ是レ我意ニ隨ハズシテ自然ニ運動スル者ナリ然  
 ルニ其拮引攣縮スルハ此亦我意ニ逆フテ自ラ運動  
 ナスル者○別テ是ヲ言ヘバ其攣急依然トシテ放解セ  
 ズ。僵硬ニシテ緩弛セズ少シモ伸縮舉動スベカラザ  
 ル症ヲ痙攣トス。唯其症發止往來アリテ頻々ニ牽引  
 拮掣スルヲ拮掣トス  
 此病ハ前ニ説ク如ク我意ニ隨テ運動スル諸部ト我  
 意ニ隨ハズシテ自然ニ運動スル内部ノ諸器トニ發  
 スルヲ以テ。内外諸部何レノ處ニモ能ク其諸症ヲ發

シ又五官眼耳鼻口意識ノ運營ヲモ失フアルガ故ニ其發見スル症狀ニ從ヒ稱スル所ノ病名甚ダ衆多ニシテ爰ニ盡ク歷舉シ易カラズ。縱タへ是ヲ舉ルモ醫術ニ益ナクシテ却テ眩亂紛錯ヲ致スト多シトス。○此病ハ其發スル部ト其部ノ主用運營トノ各異ナルニ從テ其發見スル症候モ亦種々タ較著ノ區別アリ。故ニ人皆症ヲ尋子標ヲ逐ヒ鄭重委曲ニ其患狀ヲ陳列スル片ハ醫家必ズ其施療ニ就テ許多ノ裨益ヲ得ルトアルベシト思ヘリ。是レ其標ヲ異ニシ本ヲ同フシ百候ニ一原ナルトヲ知ラザレバナリ。○治法ハ大抵標症

醫學

ニ拘ラズ唯其搐掣ヲ發スル病原ニ從テ各自ノ法方ヲ處スベシ。故ニ予今其以前ニ發セル諸症此病ヲ發スル以前ニ患ル諸症ハ即チ次ノ諸章所論ニ因テ各異ノ病原ノ脫血多血心意ノ感動等ヲ云ヲ指示シ是ニ就テ治法ヲ講明スルナリ。 痙攣搐掣ノ内因論ス。 夫レ死體ニ於テハ此症ヲ發スルト能ハザルニ就テ是ヲ觀レバ凡ソ全身一切生活ノ運動ハ悉ク是レ精氣ノ灌注スル所為ナリト云トヲ領解シ易シトス。然バ則チ此症ハ精氣ノ其患部ノ筋纖維ニ灌入スルノ強甚ナルヨリ是ヲ發スルト自ラ彰然タリ生活ノ運動ハ熱病

篇第七章ニ註ス○精氣ハ第七十章ニ註ス○筋纖維ハ第百三十八章ニ註ス○死體ニ於テハ精氣廢絶シテ諸筋ニ灌注セズ全軀活動スルナシ故ニ生活セシルテ諸筋ノ運動搖ヲ爲ス所以ノ者ハ精氣活潑健運シテ諸筋ニ灌注スルヲ以テナリ痙攣擣掣ノ症タルニ諸筋大ニカヲ生シ其部強彊牽急シテ是ヲ平全ノ人ニ比スレバ其運動尤モ強暴過烈ナリ然レバ是レ精氣ノ諸筋ニ灌注スルモ更ニ強甚ナルノ所爲タルヲ察スベキ○但、痙攣ノ症ハ患部ノ筋纖維ニ精氣ノ灌注スルヲ強甚ニシテ少シモ休止セズ相持シテ除カザルノ致ス所トシ。擣掣ノ症ハ精氣ノ強ク灌注シ。然シテ時々休止スルヲ有テ復強ク灌注スルノ爲ス所トス○右ニ説ク所ハ唯其内因ノミ。乃チ其内因ヲ生スル所以ノ原因モ亦一ナラズ。是レ宜ク其以前ニ患

第三章

所ノ證候ヲ以テ是ヲ察スベシ○其諸原因ハ皆是レ平常我意ニ隨ヒ自由ニ舉止スル運動ヲシテ更ニ其度ニ越テ強烈過甚ナラシムル者ナリト知ルベシ○痙攣擣掣。脱血ニ因ルノ症治ヲ論ス  
大ニ脱血シテ後擣掣ヲ發スルヲ屢見ル所ナリ。是故ニ人以爲ク失血斯ノ如ク其レ大ナリ。精氣當ニ大ニ虚缺スベシ擣掣ノ症亦當ニ發スルヲ無ルベシト○然レ擣掣ハ元是レ生活ノ運動太過強烈ナル者ナレバ精氣ノ灌注強甚ナルノ致ス所ナルヲ固ヨリ論ナキ所ニシテ仍前章内因ノ所説ノ如シ  
血ハ恒ニ腦ニ資給シテ諸神

經ヲ煦温滋養シ神經是ニ因テ活發和暢シ精氣氣血  
 布化シテ諸筋ニ灌注シ百體ヲ活動ス然ルニ腦ニ資  
 給スル所ヲ失フハ必ズ獨立孤行スルヲ能ハズシテ  
 スル所ヲ失フハ必ズ獨立孤行スルヲ能ハズシテ  
 神經攣縮シ精氣布化セズシテ凝滯シ忽チ奔激衝  
 突シテ諸筋ニ灌入スルノ強甚ナルヲ致スナリ○  
 但此症ハ血液ヲ保護シテ減損セザランコトヲ緊要ト  
 スルガ故ニ虛實ヲ辨セズ妄ニ刺絡シ或ハ其他驅泄  
 疎滌ノ法方ヲ施ス片々此症逾更ニ危篤ニ至ルヲ見  
 ル○此搐掣ノ症ハ體軀外部ノ血ノ脫失ニ因ラズ唯  
 腦中ノ血ノ虛缺スルニ因テ是ヲ發スルナリ故ニ血  
 ヲシテ頭腦へ上輸セシムルノ術ヲ爲スコト一大緊要  
 トス即チ婦人産後或ハ水腫ノ患者其腹ヨリ水ヲ瀉

醫學

出スルコト太甚ナル者腹ニ鍼シテ水ヲ瀉出スルヲ云或ハ下利暴下  
 ニシテ過多ナル者ニ於テ此症ヲ發スルト同シ斯ノ  
 如キ者ハ宜ク患者ノ腹ヲ緊攝固持シ血ヲシテ靜血  
 脈大幹ヨリ心藏へ歸納セシメ是レ腹部ニ縛帶ヲ施スナリ其說第百十七  
 章ニ註ス又患者ノ頭ト體トヲシテ大抵昂低ナク同  
 等ニシテ卧シムベシ  
 痙攣搐掣多血ニ因ルノ症治ヲ論ス  
 夫レ血ハ自己ノ力ノミヲ以テ孤行運動スル者ナル  
 片ハ許多ノ血自ラ腦中ニ升輸シ精氣ヲ生スルコト過  
 多ニシテ此症ヲ發スルコト固ヨリ曉會シ易シトス氣

ハ血ノ腦中ニ上輸スルニ由テ生スル者ナリ故ニ血  
多ク升輸シテ精氣ヲ生スルヲ過多ナレハ諸筋ニ灌  
入スルモ亦強甚ニシテ此然ニ血ノ質タル行止己ニ  
由ル者ニ非ズ唯動血脉ノ運動是ヲ主宰シ常ニ其運  
行ヲ抑裁調停シ分外ニ過越シテ腦ニ洪流盈滿スル  
ヲ無ラシム此說第百五十七章 ○然レモ若シ多血ノ人  
平常通泄スベキ血ノ閉滯シテ後痔血月經 擗掣ヲ發  
スルヲアルハ是レ血ノ過多ニシテ動血脉ノ運動  
ト雖モ是ヲ抑制スルヲ能ハザルノ致ス所ナリト知  
ルベシ故ニ此症ハ其他ニ幾多ノ所因アリモ更ニ是  
ニ拘ラズ先ツ刺絡ヲ施シ又患者ヲシテ頭ヲ高フシ

百二十三章

テ卧シメ諸其腹ヲ固抱緊禁スル者ヲ除キ其餘ハ第  
百二十三章ニ載ル頭眩眩冒ノ治法ヲ以テ是ヲ療ス  
ベシ

瘧瘵擗掣神經ノ感動ニ因ルノ症治ヲ論ス  
夫レ生活セル身體ハ何レノ部ニテモ侵刺衝動セラ  
ルハ其處必ズ自ラ運動ヲ増益スルヲ是レ自然  
良能ノ常道ナリ然ルニ其侵刺衝動ヲ爲スハ一ナレ  
モ其運動ニ於テハ人毎ニ輕重微甚ノ不同アリ此猶  
神思ノ外物ニ觸レテ感動スルト人毎ニ差異アルガ如  
シ外物百事ノ意識ニ感觸シテ七情ヲ誘發  
スルト人ノ稟性ニ從テ差異アルヲ云 ○予歷試



スルニ虚弱ノ人ハ些少ノ因アリト雖モ其感觸シテ  
 運動ヲ増發スルヲ殊ニ敏速ナリ。故ニ斯ノ如キ人ニ  
 於テハ長ク續テ凶厄失意ノ事アリ或ハ驚駭恐怖シ  
 或ハ大ニ諸液ヲ脱泄シ或ハ長病ニ嬰リタル等ニテ  
 其運動ヲ増發スルヲ數多シ。○總テ右ノ如キ人殊ニ  
 稟賦脆弱ナル婦人ハ其初腹中ノ諸藏紊亂攪擾シテ  
 失常ノ運動ヲ發シ夫レヨリ漸ク増劇シテ上部ニ衝  
 逆シ咽喉ニ迫テ嚥下ヲ妨碍シ呼吸ヲ障遏スルニ至  
 ル。是ヲ名テ子宮衝逆ト云子宮衝逆ハ和蘭名「オッフス  
 テイギング・ハン・デ・ムール」一  
 名「ムール」スベシ是レ世ニ云婦人積聚  
 衝逆ノ症ナリ又第五十八章ニ出ツ○此症増長スル

片ハ四肢ノ神經ニ連及シ手足ニ搖掣ヲ患者遂ニ人  
 事ヲ省セザルニ至ル。是ヲ名テ癩ト曰フ和蘭名「ハル  
 レン」デシキ  
 ○少女子ニ於テ此病ノ一種驚異スベキ奇狀ノ運  
 動ヲ四肢ニ發スルヲアリ。是ヲ名テ舞蹈病ト云フ和  
 蘭  
 名「シントヒ」チ「ダンス」伍「イ」都ノ醫學寶函ニ曰ク舞  
 蹈病ハ妄ニ舞蹈シテ休マズ手足身體ヲ運動スルヲ  
 甚ダ驚異スベキ奇態ヲ爲シ神思狂錯シテ自○斯ノ  
 ラ知覺セズト羅甸「ダラ」シ「ス」モ「ト」名「ク」  
 如ク其症ニ從テ許多ノ病名ヲ布演スト雖モ予ハ是  
 ヲ濫名ニ屬シテ用ナシトス。是レ皆其療法ヲ一ニシ  
 テ治スベキガ爲ナリ。○此患者ハ神經ノ感動シ易キ  
 ニ因テ此症ヲ發スルノミナラズ或ハ第二十六章ニ

論スル自性ノ腐壞ニ因テ神經液酷厲ニシテ稀涼トナルヨリモ亦是ヲ發スルナリ。此ニ由テ是ヲ觀レバ其人啻ニ感觸等ノ些少ナル外因ノミナラズ酷厲液ノ侵刺衝動スル所ノ内因ヨリモ亦此搐掣ヲ發スルナリ。○是故ニ啻ニ痙攣搐掣ヲ靜止スルノミナラズ又其稀涼ナル酷厲液ヲ治スル藥劑ヲ用ルヲ緊要タリ。○其標症ノ痙攣搐掣ヲ治スルニハ帶或ハ何ニテモ便宜ノ物ヲ取テ胃腹ノ間ヲ緊縛シ。又走竄揮發ノ鹽類琥珀鹽、鹿角鹽、硃砂等ヲ云或ハ迷迭香精、默栗薩精、琥珀油以上出名或ハ乾白揮發鹽製法第百八章ニ載スヲ以テ鼻下ニ接シ

其藥氣ヲシテ吸引セシムベシ。○若シ患者神識知覺ヲ失ハズ唯頻々ニ搐掣ヲ發シテ休ザル者ハ左ノ方ヲ用フベシ。  
**鎮痙飲**

默栗薩水六

迷迭香精二錢

琥珀二

揮發香竄精二十五滴

阿芙蓉液十五滴

白罌粟舍利別四錢

右件調勻シ搗掣ノ靜止スルマデハ四分時毎ニ一  
 匙ヲ與ヘ其後モ一兩日ノ間ハ半時若クハ一時毎  
 ニ服セシムベシ  
 若シ其症意ノ如ク治スルモハ宜ク其胃腹ヲ緊縛シ  
 タル帶ヲ一頓ニ解クナク漸次ニ緩弛シ除クベシ  
 右ノ如ク強ク緊紮シテ暫ク諸藏ノ運營ヲ妨碍スル  
 ガ故ニ一頓ニ放解スルモハ是ニ次テ諸症ヲ發スル  
 予屢目撃スル所ナリ○爾後ハ第二十六章ニ記ス  
 所ノ寒壞液ノ方ヲ用ベシ○又此病ニ殊効ノ劑アリ  
 是ヲ左ニ示ス

方  
 乳香 琥珀 各一錢  
 瓦爾拔奴護 三錢  
 拔爾撒謨 半錢  
 拘椽皮油 六滴  
 阿芙蓉 精製者 三錢  
 亞尼皮 適宜  
 右件合シテ每一錢二十九卜シ。毎服二九。日三數次  
 用フ

**鎮痙除壞丸**  
 此丸專治痙攣之症其效如神

曾下...  
 ...  
 ...

搐掣。小兒ニ發スルノ治法ヲ論ス

小兒ノ搐掣ハ大率大人ニ發スル者ト治療ヲ異ニシ  
 且醫家各是ヲ治スル秘授禁方多キガ故ニ予茲ニ唯  
 其治法ノ綱要ヲ説示スナリ○初生兒未ダ黑色ノ胎  
 尿ヲ通利セズシテ搐掣ヲ發スルハ其胎尿腸中ニ鬱  
 蓄シテ酷厲毒トナリ。是ヲ以テ侵刺シテ疼痛ヲ發シ  
 且小兒ノ體質脆弱ニシテ甚ダ感動シ易キガ故ニ其  
 酷厲毒ノ侵刺ニ堪ズシテ數搐掣ヲ發スト知ルベシ。  
 厄而埳兒蘭土和蘭七州ノ一ナリニ是ヲ漢成健ト謂ヒ其他ニ是  
 才的兒迷念ト謂フ蒲郎加爾都ノ小兒搐掣門ニ云小兒ノ搐掣拂利斯蘭土於テハ是

此症ニ臨テハ次ニ出ス  
 掃腸解毒飲  
 藥ヲ用テ其大便ヲ利スベシ

大黃

霸王鹽 各半錢

薄荷水 三勺

滿那 二錢

右件合和シ藥氣ヲ泡出シ滓ヲ去リ半時若クハ一  
 時半ニ一琶布匙宛與ヘ。大便多ク通スルニ至ル  
 ベシ。其後モ日ニ一兩度ハ一匙宛與テ大便ヲシテ

能ク通セシメ其胎尿盡ルヲ度トスベシ。是ニ因テ  
搖掣自ラ治スルナリ

右ノ搖掣ノ症。多クハ其初生ヨリ乳母ヲ以テ是レヲ  
養ヒ或ハ糊漿ノ類ヲ以テ是レヲ育シテ生母自ラ其  
初乳ヲ與ヘザル小兒ニ於テ發スル者ナリ。其故ハ生  
母ノ初乳ハ即チ是レ造物者ノ自然ノ安排ニテ其胎  
尿ヲ滌除セシメンガ爲ニ正ニ新娩ノ際ニ當テ賦與  
スル所ノ者ナレバナリ。始テ都ノ醫學實函ニ云産後  
ニテ其質稀薄ニシテ水様ナリ。是レ小兒ヲ養フニ  
シカテ甚ダ切要ト雖モ却テ是レ以テ其胎尿ヲ驅  
除スルニ甚ダ微苦ク是ヲ以テ能ク其腸中ニ有ル所  
ノ汚穢不潔ノ物ヲ滌除スレバナリ。或ハト○蒲郎加爾都  
ノ醫術新論小兒初生門ニ曰ク人或ハ以テ幼兒ヲ養フニ  
テ出ル乳汁ハ其性常ニ異ナルヲ以テ幼兒乃チ是レ  
宜シカラズト殊ニ知ラズ其常ニ異ナル所乃チ是レ  
造物者ノ機巧全能愛ニ賦與スルニ懇到周悉ナルヲ  
見ス。却テ能ク其胎尿ノ粘汚不潔ヲ淨刷疏滌スル者  
ナリ。何トナレバ挽後ノ新乳ハ其兒ノ腸ヲ侵刺衝動シ  
漸次ニ汚物ヲ推疊シテ導泄ハ其兒ノ腸ヲ侵刺衝動シ  
ナリ。天造ノ妙機復奚ゾ人爲ヲ其間ニ容ンヤト

腸中ニ酷厲ナル酸敗液アリテ侵刺衝動シ以テ是ヲ  
發スルナリ。何トナレバ凡ソ小兒ハ乳糜ヲ製造スル  
諸器胃腸肝膽甚ダ脆弱ナルガ故ニ蒸餅ヲ喫シ乳汁  
ヲ飲ト雖モ温煖ナル虞腸ニ鬱滯シテ變敗シ易ク且

方

蝟蛄散

蝟蛄石  
鹿角灰  
琥珀 各一錢  
酒石鹽 半錢  
橙皮油 三滴  
右件合シテ散劑トシ兌ドイト禿孔ナシ銅錢ノ名形圓ニシテ  
鈔シツテ落ガルヲ度トシ是ヲハツ琶布名以許ニ和シ與ル  
七日ニ數次  
小兒良長シ。始テ齒ヲ生スル頃ニ至テハ乃チ齒ヲ生  
スル疼痛ニ由テ動輒搐搦ヲ發スルアリ。此時ニ於

自訂科撰要 卷九 風雲堂藏

テハ其齒ヲ生スルト。胃腸ニ酸敗ノ酷厲毒アリテ刺戟スルトニ由テ此症ヲ發スル者ナリ。○此症ハ即チ前ニ出ス所ノ散劑ニ精製阿芙蓉（名）二匹ヲ加ヘ用ヒテ良驗アリ。但シ仔細ニ意ヲ用ヒテ是ヲ合和スベシ。小兒ハ一頓ニ多ク阿芙蓉ヲ與ル（アタラフ）トテ恐ルガ故ニ若シ調勻セザル所アルキハ偏ニ多ク是ヲ與ルノ害アレバナリ。

增補

醫書

呃逆篇第二十二

羅甸名「シンギル」カス  
和蘭名「ヒツキ」

附 肝 厥 衝

呃逆ノ大較ヲ論ス

呃逆ハ横膈ニ於テ卒ニ搗掣ヲ發シテ頻ニ下部ニ牽引シ胸腔ノ諸器是ニ從テ皆牽引スルノミナラズ喉頭モ齊（トク）ク牽縮スルニ因テ必間吸氣ヲ阻遏シテ肺ニ入ルトテ得サラシムル病ナリ。其横膈ノ下部ニ牽引スルト平人ノ疾ク氣ヲ吸入スルニ因テ横膈卒ニ低下ルニ異ナラズト雖モ此病ハ喉頭牽縮スルガ故ニ自ラ聲ヲ發シテ必シク吸氣ヲ通スルノミ此其同シカラザル所ナリ。

呃逆。胃及ヒ胃管ニ滯著スル物ニ因ルノ治法ヲ論ス

凡ソ有毒ノ諸品ヲ内服シ或ハ固ヨリ體中ニ鬱蓄セ  
ル諸酷厲毒アリテ胃若クハ胃管ニ繫著シ。横膈ヲシ  
テ搖掣ヲ發セシムル片ハ輒チ呃逆ヲ發スルナリ○  
所謂ル有毒ノ品類ハ假令バ安質沒扭<sup>ア</sup>ノ製劑ノ如  
シ。總テ斯ノ如キ類ハ患者ノ内服セル藥ヲ問テ知ル  
ベシ○所謂ル酷厲毒ハ膽液質ノ毒。傷冷毒。壞液毒。腐  
敗毒。膿壞毒等ナリ此皆其性惡厲ニシテ體中所在ノ  
各部ヨリ胃或ハ胃管ニ轉移シ來テ繫著スルナリ○

或ハ常用ノ食料。無毒ノ品ト雖モ過食シテ飽滿シ或  
ハ停滯シテ善化セズ遂ニ變シテ不良ノ乳糜ト爲リ  
或ハ胃中ニ蛔蟲アル片ハ皆能ク呃逆ヲ發スルナリ  
○右ノ諸因各異ナリト雖モ唯其胃或ハ胃管ニ滯著  
スル者ヲ吐セシメテ是ヲ除ク片ハ此症自ラ瘳ユ。故  
ニ汚滯ヲ滌刷シ胃ヲ振蕩シテ湧吐セシムル劑<sup>即チ</sup>  
五章ニ載ル<sup>吐劑ナリ</sup>ヲ用テ是ヲ治スベシ或ハ患者自ラ嘔吐  
ヲ發シテ即チ治スルナリ  
呃逆。胃管中滑液ノ剝脫ニ因ルノ治法ヲ論ス  
凡ソ性ノ酷厲ニシテ侵蝕スル物ヲ内服スルニ因テ

增訂外科摘要 卷九 第廿章 第廿章 風雲堂藏



平常胃管ノ裏面ニ周ク塗布シ在ル所ノ滑液ヲ剝脱  
スル片ハ亦呃逆ヲ發スルアリ其酷厲毒胃管中ノ  
ニ胃管ヲ侵刺シ其神經攣縮スル片ハ自ラ横  
膈ニ連及シテ擗撃ヲ發シ呃逆ヲ生スルナリ此症ハ  
宜ク脂油ノ類甘麻油亞麻油阿利機油等策烈乙ノ類葵根罌粟玫  
角膠ノ類鹿其他粘滑ナル諸品ヲ用ヒテ是ヲ治  
スベシ

第二章

呃逆。諸脫液。失血ニ因ルノ治法ヲ論ス  
嘔吐。下利。赤利。乳糜利。飧泄利。矢血等太甚或ハ吐下ノ  
劑ヲ過用スルニ因テ頓ニ體中滋養ノ諸液ヲ亡脱シ  
呃逆ヲ發スル者アリ第四百十一章ノ脫血ニ因テ痛

此症ハ大ニ危篤トス。治法宜ク先ヅ其脫泄ヲ治ス  
ル方法ヲ施シテ速ニ是ヲ遏止シ其治法各門ニ又繙  
帶ヲ腹部ニ施シ從テ健胃劑萎黃病篇鎮痙劑痙攣篇  
催睡劑第四十一章ヲ用テ呃逆ヲ治スベシ註角法ヲ腹  
部ニ施シ治スルアレバ此症ニ於テハ必ず功ナシ  
註此呃逆並ニ間歇熱ヲ患テ大ニ衰弱シテ發スル  
呃逆ハ次ニ記ス飲劑大効アリ。宜ク四分時ニ一匙  
宛與フベシ

默栗薩消呃露

默栗薩水 六弓

薄荷水 二勺

醋 一勺

蝻蛄石

珊瑚 各一錢

結爾茂斯 昆設爾弗 一錢

白罌粟舍利別 六錢

右調勻ス

呃逆。腐敗ノ乳糜ニ因ルノ治法ヲ論ス

乳糜腐敗シ其性酷厲トナリテ腸中ニ懸留シ。呃逆ヲ發スル者アリ。此症ハ宜ク下劑ヲ與ヘ且催睡劑ヲ兼

胃管

用シテ其毒ヲ驅除シテ治スベシ其酷厲腐敗ノ毒所隨テ侵刺シ神

胃管。胃或ハ腸ニ於テ焮衝若クハ羅斯ヲ發シ焮衝ハ

留熱第三章 熾盛熱第百十八 腐敗熱第二十五 等ノ熱

患者煩悶シ。心ニ當テ痛ニ。大熱熾ガ如ク燥渴ス。此症甚ク危篤トス。宜ク諸暴劇急疾ナル病ノ如ク是ヲ療

增訂外科雜要 卷九 第百四十九章 第百五十五章 風雲堂藏

第五章

スベシ 協シ 斯テ 盧云ク 熾盛熱 胃 熾衝 其他 内部ノ 熾  
消石ノ 未ニ 龍腦ヲ 加ヘ 内服セシム 必ス 危篤トス 宜ク  
精固ヲ 與テ 屢良驗ヲ 得タリト 蒲剛云ク 惡性熱 勞  
瘵熱 瘡ニ 呃逆ヲ 發スルハ 死徴トス 胃 橫膈ノ 熾衝  
其他 斯ノ 如キ 症ヨリ 呃逆ヲ 發スルモ 亦 危險トス 治  
法 宜ク 刺絡ヲ 施シ 甘消石 精一ニ 滴宛 葡萄酒 精ニ 加  
ハ 數用ベシ 又 乳汁ヲ 温メ 布片ニ 蘸シテ 胃ノ 部ヲ 蒸  
貼スベシ

呃逆 間歇熱ニ因ルノ治法ヲ論ス

間歇熱ノ發作ニ就テ呃逆ヲ發スルアリ。是レ呃逆  
ニ關涉ル所ノ諸部。其發作ノ熱勢ニ感觸シテ是ヲ發  
シ。或ハ其熱毒ヲ其部ニ排泄シ出スニ因テ是ヲ發ス  
ル者ナリ。是レ其熱ニ因テ發スルガ故ニ間歇熱ヲ除

第五章

治スレバ此症更ニ治療ヲ加ヘズシテ自ラ愈ユ  
涉ル諸部ハ胃管 胃腸ナリ。此部其熱勢ニ感觸シ 橫膈  
ニ連及シテ 擗撃ヲ發スルナリ。其發作ノ時 其毒ヲ  
胃管 胃腸ニ 排泄シ 出スルハ 其毒ノ 侵刺スルニ由テ  
其部 擗撃シテ 橫膈ニ 連及シ 又是ニ 擗撃ヲ發スルナ  
リ

呃逆 肝ノ熾衝ニ因ルノ症治ヲ論ス

肝藏ニ熾衝或ハ羅斯ヲ發スルニ因テ呃逆ヲ發スル  
アリ。肝ノ凸處ニ於テ是ヲ發スルヲ殊ニ多シ 肝ノ  
ト上面ハ凸ニシテ 橫膈ニ 著ク 故ニ 橫 其候 肝ノ 部位  
膈ヲシテ 擗撃シテ 擗撃ヲ發セシム 上腹ノ 右邊ニ 於テ 疼痛 腫起 築動ヲ發シ 總身 黃色ア  
ル等。其他 肝 熾衝ノ 諸症ヲ見スナリ。此症 宜ク 眞ノ 肝

焮衝トシテ療スベシ肝焮衝ノ治法大抵第二百三十  
 治法ト同シ初ハ刺絡ヲ施ス一大緊要トス又清  
 壯熱スル者ハ初ハ刺絡ヲ施ス一大緊要トス又清  
 涼飲スル外敷劑ヲ頻ニ患部ニ施シ或ハ清涼緩和ノ効  
 了ル吉利詞多兒ヲ施シ是ヲ治スベシト○清涼飲  
 並ニ吉利詞多兒ハ熱病ノ方ノ如シ酸性ノ精ハ消  
 石精綠礬精硫黃精等ヲ云龍腦乳外敷劑  
 劑等ノ諸方第二百三十三章ノ註ニ出ツ

毒

短肋或ハ劍狀軟骨鳩尾ヲ損傷スルニ就テ橫膈或ハ  
 胃ヲ妨害シ呃逆ヲ發スルアリ此症ハ宜ク整骨ノ  
 手術ヲ行ヒ或ハ角法ヲ施シテ是ヲ治スベシ  
 呃逆頭蓋骨損傷ニ因ルノ治法ヲ論ス

毒

頭蓋ノ打撲骨傷ニ就テ腦ヲ毀傷シ因テ呃逆ヲ發ス  
 ルアリ此症最モ危險ニシテ治シ難シ但其損傷幸  
 ニ回復シテ後呃逆ナホキ仍歇カサル者ハ宜ク痙攣搐掣ヲ靜  
 止スル藥劑ヲ用テ是ヲ治スベシ其劑痙攣搐掣  
 增註 呃逆ハ種々ノ因アリテ橫膈或ハ胃ノ神經纖  
 維ヲ侵刺シ其部ニ搐掣ヲ發スルナリ其因ハ過食  
 多飲中毒或ハ胃橫膈膀胱其他内藏諸器ノ焮衝治法  
第百五十五章ニ出ツ硬腫癰瘡或ハ勞瘵熱惡性熱或ハ瘧氣鬱  
 蓄或ハ胃中酷厲液アル等ナリ治法 風氣ヲ生スル  
 食物及ビ消化シ難キ物ヲ喫メ此症ヲ發スル者ハ

增訂本草綱目 卷九 第百五十三章 第百五十四章 風雲堂

醇厚ノ蒲萄酒燒酒等一盞ヲ用レバ治ス○中毒ヨ  
リ發スル者ハ乳汁或ハ甘和ノ油類ヲ饒多ニ與フ  
ベシ○胃中ニ粘液或ハ腐敗膽液等鬱積ノ發スル  
症ハ吐劑或ハ下劑ヲ用テ是ヲ除クベシ○痞氣鬱  
蓄ニ因ル者ハ破氣驅風劑ヲ用ヒテ治スベシ 諸氣  
出 ○癌瘡或ハ壞疽ヲ内部ニ生メ此症ヲ發スル者  
ハ幾那ヲ用ルヨリ峻効アルハナシ○凡ソ頑固ノ  
呃逆ハ香烈竄透ノ品及ヒ鎮痙劑ヲ用フベシ其尤  
稱スベキハ麝香ナリ宜ク十五分或ハ二十分ヲ一  
服トシ煉膏ニ和シ其症ニ從テ數次用フベシ阿芙蓉

蓉劑モ亦間捷効アリ然レヨク病因ヲ商量シ仔細  
ニ戒慎ノ用フベシ或ハ刺賢埴兒精 名ニ沙糖一塊  
ヲ溶シ數用ルモ良○外敷藥ハ的里亞加ヲ取り大  
胃ノ部ヲ蓋フ許ニシ胃ノ部ニ貼ノ効アリ○一患  
者呃逆ヲ發メ歇ガル一六十三日。麝香阿芙蓉其他  
壯神鎮痙ノ諸劑ヲ用ヒテ稍休ム一アレレ復發ス  
然ルニ稀キ麥酒ヲ與レバ此症暫ク差多ク與フレ  
ハ數日休ム然レ患者終ニ吐血ノ死ス其屍ヲ剖觀  
スルニ胃ノ下口ニ一大硬腫ヲ生ゼリ 右遠西名醫  
蒲野内科書  
出 ○呃逆ハ胃及ヒ橫膈ノ筋纖維ニ搐掣ヲ發スル

增訂内科要略 卷九 十八 風雲堂

ナリ此症。子宮衝逆或ハ蛇蟲或ハ腎痛結石等ノ疼  
 痛。疝痛ヨリ發シ或ハ胃中風氣痞滯膨脹ノ發ス。風  
 氣ノ症ハ驅風藥即チ沈菖根。山柰。良姜。茴香。葛縷子  
 等ノ末或ハ是ヲ水煎シ或ハ葡萄酒ニ煮テ服シ或  
 ハ杓椽皮精。甘消石精。的里亞加精。時蘿油。葛縷子油。  
 加密列油等皆効アリ或ハ的里亞加一錢ヲ葡萄酒  
 ニテ服ス或ハ薄荷昆設爾弗ヲ以テ服ス皆速効ア  
 リ斷○右ノ製劑  
 皆固ニ出ツ

頭痛篇第二十三

羅甸名「セパラルア」  
和蘭名「ホーフドレイン」

頭痛ノ大較ヲ論ス

醫家者流。科ノ内外ヲ問ハズ諸病ノ名稱ヲ識リ。徒ニ  
 其名ニ就テ方ヲ處シ皆其肯綮ニ中テ治効ヲ奏スル  
 者ナラバ則チ頭痛ニ於テモ亦甚ダ治シ易シトス。何  
 トナレバ患者自ラ能ク其患狀ヲ説テ徑ニ頭痛ノ病  
 タルヲ知レバナリ。乃チ其痛固有ノ宿疾ニ非ズシ  
 テ今新ニ發スル者ハ是ヲ設撥刺魯細亞ト謂フ。或ハ  
 其經久ニシテ滯患トナルハ是ヲ設撥刺亞ト謂フ。或  
 ハ其一方ニ偏ナルヲ歇迷葛刺泥亞ト名ク漢醫ノ所  
謂偏頭痛

ナリ或ハ頭ノ各處ニ限リテ痛ムヲ葛刺<sup>カ</sup>吸<sup>ラ</sup>私<sup>ス</sup>ト名ク○  
右ノ如ク名稱ヲ分別スレバ一モ治療ニ益ナシ。唯其  
發見スル所ノ症候ニ就テ病原ヲ辨晰シ是ニ從テ治  
法ヲ施設スレバナリ

頭痛ノ内因ヲ論ス

夫レ凡百ノ感觸。寒熱痛痒。等ヲ知ル諸器ニハ神經<sup>子</sup>遍  
ク布蔓シ精氣其中ニ流通シテ能ク其感觸知覺ヲ爲  
スナリ。然ルニ若シ其流通スル所ノ精氣ヲ障碍スル  
ト有片ハ其處則チ疼痛ス。此即チ自然ニ然ク賦與ス  
ル所ニシテ造物者ノ天工ナリ○是故ニ其神經ヲ壓

迫シ或ハ伸引シ或ハ劇<sup>シ</sup>ク運動スル等ノ諸因ハ即チ  
皆疼痛ノ起因トス。然レバ其因甚ダ多端ニシテ治法  
ノ適從スル所ヲ推究シ難シトス○然レ予其中ニ就  
テ常ニ多ク頭痛ヲ發スル所ノ最モ彰著ナル諸因ヲ  
舉テ左ニ演說ス

頭痛血ノ頭ニ上衝スルニ因ルノ症治ヲ論ス

凡ソ血ハ自己ノ力ノミヲ以テ運行スル者ニ非ズ。唯  
動血脉ノ機轉<sup>ハムラキ</sup>ニ因テ運輸セラル、者ナリ。然レバ頭  
痛ニ於テハ人皆血ノ頭ニ衝突激注スルノ致ス所ナ  
リト曰フト雖モ必ズ其因ヲ血ニ於テ求ムベカラザ

ル者ナリ動脈管ノ弛張伸縮シテ搏動スル機轉ニ因  
上衝スルモ動脈ヲシテ其血ヲ多ク升輸セシムルニ  
諸因アルニ非レバ上衝セズ血ノ自己ノ力ノミニテ  
運行スル者ニ非レバナリ此説使血人大ニ擾動シ  
第四百四十二章ニ出併考フベシ設使血人大ニ擾動シ  
テ殊ニ頭ニ衝突スルコトアリト雖モ常ニ必ズ頭痛ヲ  
發スルニ非ズ則チ諸熱病或ハ大ニ身體ヲ使役シ手  
足ヲ勞動スル作業ノ人ノ如キハ其血大ニ沸騰シテ  
頭ニ上衝スルコト多シト雖モ更ニ頭痛ヲ發セザル者  
アルヲ以テ知ルベキナリ○然レ第四章ニ説ク所ノ  
熱毒多ク頭中ニ升輸シ且滞住スル片ハ其熱増劇ス  
ル時ニ至テ更ニ頭痛ヲ發シ頭部及ビ顛顚ノ動血脉

跳動シ耳ニ蟬鳴ヲ聞キ面目赤フシテ盈脹シ患者自  
ラ頻ニ小蛇ノ如キ赤條及ビ火光ノ飛迸シテ眼中ヨ  
リ閃發スルガ如キヲ見ルコトアリ或ハ睡寐スルコト能  
ハズ或ハ微鬱冒シテ醒了ナラズ昏睡様ノ症ヲ兼發  
スルナリ大抵斯ノ如キ頭痛ハ第四百三十二章ニ説ク  
所ノ謔妄發狂第四百四十二章ノ搖掣若クハ第四百七章  
ニ載ル昏睡病ノ蒿矢ナリト知ルベシ然レ若シ此時  
ニ於テ衄血ヲ發スレバ頭痛是ニ從テ輕差シ右ノ諸  
惡症ニ陷ル危懼鮮シトス○是ヲ以テ其治法數刺絡  
ヲ施シ且第十二章ニ出ス清涼下劑ヲ用ヒ又精神錯

增訂内科摘要 卷九 風雲堂





兒ヲ把テ乳香。蘇合香。鵝栗拔奴謨<sup>○</sup>ノ煙ヲ薰シ頭ニ被フベシ

痛風

頭痛。痛風毒ニ因ルノ症治ヲ論ス

痛風ノ酷厲液。外部四肢ノ神經及ビ諸膜ニ滯著シテ痛ヲ發スルヲ多シト雖モ或ハ腦膜ニ襲入シテ耐忍フベカラザルノ頭痛ヲ發スル者亦甚々多シ○其尋常ノ症候ハ第五十二章ノ所說ニ就テ是ヲ察スベシ○其素ヨリ患ル所ノ外部四肢ノ疼痛消散シ。是ニ次テ頭痛ヲ發スルハ即チ其毒。腦膜ニ侵襲スル確候トス○此症ハ第五十四章ニ舉ル痛風ノ藥劑ヲ用ヒス

先菁膏

先菁膏ヲ外部四肢ニ貼シテ勉テ頭中ノ酷厲液ヲ外部ニ導泄シ除クベシ○又予此症ニ打膿法<sup>鐵鍼ヲ以テ皮上ニ</sup>瘡口ヲ作リ膿ヲ釀シテ病毒ヲ排泄スル術ナリ。其法<sup>○</sup>ニ載スヲ一兩處ニ施シテ甚々驗アリ

頭痛。頭中ノ惡液ニ因ルノ症治ヲ論ス

頭中ノ空隙ニ液汁滯滯シテ腐敗シ因テ頭痛ヲ發スルヲ常ニ屢アルベキ所ニシテ固ヨリ異ムニ足ラストス<sup>腦ニ四ノ空隙アリ。皆腦ノ披裂積穢ノ間隙ナリ。是レ其所在ノ腺ヨリ分泌スル所ノ津液ヲ受テ腦ヲ滋潤シ其粘濁ノ滓液ハ常ニ嗅神經ニ送り鼻ニ泄シテ涕液トナリ或ハ腦中ノ漏斗ト名ル器ヨリ粘液腺ト云ヘル腺ニ下リ其故ハ腦膜ノ間空隙ノ内ニ頭靜脈ノ中ニ注ハス</sup>

ハ尿管ノ外ニシテ常ニ其部ヲ浸潤スベキ許多ノ津液アレバナリ。腦膜ノ間トハ厚腦膜ト薄腦膜トノ間ノ諸液ハ尿管中ニ在ルヲ常トス。然ルニ此津液ハ尿管中ニアラズシテ其空隙内ニアルヲ以テ尿管外ト云。猶心囊中ニ水。○若シ其液空隙ニ鬱滯シテ緒留スル片ハ頭鈍痛シテ重キヲ覺エ。又其滯緒スル久フシテ腐敗シ終ニ酷厲ノ性トナル片ハ則チ曠日彌久ニシテ休歇ナキ頭痛ニ罹ルナリ。此症甚ダ治シ難シトス。○其治法。唯其惡液ヲ鼻ヨリ導泄シ或ハ大便ヨリ驅除スルヲ最モ良トス。即チ次ニ列スル誘嚏散ヲ用ベシ。

誘嚏散ノ方

誘嚏散

茉莉玉刺那葉 各一錢

薄荷葉

默栗薩 各一錢

龍骨木脂 半刀

右件調勻シテ散劑トシ。少許ヲ取テ鼻引シ以テ嚏ヲ發スルヲ日ニ數次

瀉利丸ノ方

瀉利丸

護謨安沒尼亞幾 一錢

蘇合香 半錢

蘇甘謨スカムモ 一カム日

迷迭香油ミシエ 五カ滴

酒石鹽 半カ日

右件合シテ每一錢二十丸トシ。朝夕兩次各六丸ヲ服ス。下利ノ多少ヲ視テ服度ヲ増減ス。患者大便スルカ日ニ兩三次ナルヲ佳トス

頭痛。胃中ノ惡液ニ因ルノ症治ヲ論ス

夫レ胃ト頭ト上下遠ク相隔處スト雖モ其運營甚ダ近ク相通スルニ因テ頭ノ諸病多クハ胃ニ感觸スルナリ此說第百二十七章ニ註ス故ニ頭痛ヲ患ル人ハ大抵食ヲ次

スルノ機ヲ失ヒ。胃中ニ惡液ヲ生スレバ多クハ頭痛ヲ發スルナリ○是ヲ以テ頭痛ノ症ニ值アス毎コトニ是レ胃中ニ鬱積アルノ致ス所ニ非ルヤト仔細ニ診察スルヲ緊要トス。若シ其因。胃中ニアル者ニシテ徒ニ頭痛ヲ治スル諸藥ヲ用レバ皆勞シテ功ナケレバナリ○若シ患者。從前飲食ヲ思ハズ或ハ食スレモ消化シ難ク。噯氣シテ臭敗ノ液ヲ吐スル等ノ症アリテ頭痛ヲ發スルカ有カ先ツ第十五章ノ吐劑ヲ用ヒテ其胃ヲ淨刷シ。次テ第二十章ノ健胃劑ヲ用ヒテ胃ノ消化ノ官能ヲシテ再ビ故ニ復セシメ。又其間ニ前章ノ

瀉利丸ヲ用テ大便ヲ開利シ居恒壅滯セシメザルヲ  
肝要トス○此症ハ頭痛ノ藥ヲ用ヒズシテ頭痛自ラ  
能ク瘥ユ是其頭痛ノ因ヲ驅除スレバナリ

增補重訂内科撰要卷九終



# 書賈

江戸淺草茅町三丁目

須原屋伊八

浪華心齋橋通北久太郎町

河内屋儀助

同心齋橋通唐物町

河内屋太助

京三條寺町西入町

丸屋善兵衛



